

# 『バベルの学校』 プレス資料

2015年1月31日 新宿武蔵野館・渋谷アップリンクにて劇場公開！全国順次ロードショー。



『パパの木』、『やさしい嘘』（カンヌ映画祭批評家週間賞）のジュリー・ベルトウチェリ監督作品

ある教師の人生最後のクラスにそれぞれの事情をかかえて集まった国籍がバラバラの生徒たち…。出会い、そして別れ。国境を超えた友情に心温まる感動のドキュメンタリー。

## SYNOPSIS

アイルランド、セネガル、ブラジル、モロッコ、中国…。世界中から11歳から15歳の子どもたちがフランスにやって来た。これから1年間、パリ市内にある中学校の同じ適応クラスで一緒に過ごすことになる。

24名の生徒、20の国籍…。この世界の縮図のような多文化学級で、フランスで新生活を始めたばかりの十代の彼らが見せてくれる無邪気さ、熱意、そして悩み。果たして宗教の違いや国

籍の違いを乗り越えて友情を育むことは出来るのだろうか。そんな先入観をいい意味で裏切り、私たちに未来への希望を見せてくれる作品。

## STORY

アイルランド、セネガル、ブラジル、モロッコ、中国…。11歳から15歳の子どもたちが世界中からフランスのパリにある中学校にやって来た。24名の生徒、20の国籍、そして24のストーリー。家庭的な事情でやってきたもの、辛い母国の生活から逃れてきたもの、亡命を求めてやってきたもの、または単によりよい生活を求めて移民して来たものなど理由は様々。



フランスに来たばかりの彼らが入ったのは適応クラス。このクラスでフランス語を学び、話せるようになるための集中トレーニングを受け、やがては通常のクラスに移るために、他の教科も学んでいく。

国籍も宗教もフランスに来た理由も違う子どもたちの中には時に大声で口論し、泣き、自暴自棄になる子も。ブリジット・セルヴォニ先生は、そんな子どもたちを驚くほどの辛抱強さで見守り、なだめ、そして導いていく。

国籍も宗教も家庭のバックグラウンドも違う十代の生徒たちが、異国の地フランスで、言葉もままならないなか

お問い合わせ先： 配給・宣伝 ユナイテッドピープル 関根・井上・竹村  
092-407-9799 [press@unitedpeople.jp](mailto:press@unitedpeople.jp)

葛藤を抱えて新生活を初め、時にぶつかりながらも様々な壁を乗り越えて友情を育んでいく。そんな彼らの姿は私たちに未来への希望を見せてくれる。

□ブリジット・セルヴォニ先生は現在 24 の学校、380 の先生を監督するフランス国民教育省の教官となりました。

## 監督プロフィール

ジュリー・ベルトウチェリは、オタール・イオセリアーニ、クシニョトフ・キェシロフスキ、エマニュエル・ファンキエル、ペルトラン・タヴェルニエ等の助監督を務めた後、1993 年に監督としてのキャリアをスタート。独仏共同テレビ、アルテにて自身が監督した数々のドキュメンタリーが放送され、その独自の視点が注目された。

世間の注目を浴びるきっかけとなったのは、ドキュメンタリーではなく劇映画で、初の長編監督作品『やさしい嘘』(03) は 2003 年のカンヌ国際映画祭「国際批評家週間」グランプリを受賞し、2004 年にはセザール賞新人監督作品賞など数々の賞を受賞。オーストラリアで撮影し、シャルロット・ゲンズブール主演の長編二作目『パパの木』(10) は、2010 年のカンヌ国際映画祭クロージング作品として招待された。現在は、ドキュメンタリー映画『バベルの学校』の製作を経て三作目の長編制作を進めている。



監督：ジュリー・ベルトウチェリ 編集：ジョジアンヌ・ザルドーヤ

オリジナル音楽：オリヴィエ・ダヴィオー サウンド：ステファン・ブエ、ベンジャミン・ボベー

ミキサー：オリヴィエ・グエナー 制作：Les Films du Poisson、Sampek Productions

共同制作：ARTE France Cinema 配給：ユナイテッドピープル 原題：La Cour de Babel

後援：在日フランス大使館／アンスティチュ・フランセ日本

フランス/2013 年／フランス語／89 分／1.85:1／カラー／5.1ch／ドキュメンタリー

オフィシャルサイト <http://unitedpeople.jp/babel/>

### 【フランス本国の興行成績】

900 館で上映。19 万人動員。興行収入 125 万ユーロ（約 1 億 7000 万円）。

### 【フランス映画祭（日本）での上映】

2014 年 6 月 28 日、有楽町朝日ホールにて上映。約 450 人程度動員。40 代～50 代中心、男女比 4:6。

### 【海外映画祭出品状況】

アブダビ国際映画祭 2013、ローマ国際映画祭 2013、イスラエル国際映画祭 2014

イスタンブール映画祭 2014、サンフランシスコ国際映画祭 2014、シェフィールド国際ドキュメンタリー映画祭 2014、シドニー映画祭 2014、リンツ映画祭 2015

お問い合わせ先： 配給・宣伝 ユナイテッドピープル 関根・井上・竹村  
092-407-9799 [press@unitedpeople.jp](mailto:press@unitedpeople.jp)

# ジュリー・ベルトウチェリ監督、ブリジット・セルヴォニ先生

## オフィシャルインタビュー



※右がジュリー・ベルトウチェリ監督、  
左がブリジット・セルヴォニ先生。以下、  
監督の回答を（監）、先生の回答を（先）  
で記載しています。

**Q. まず、この映画をつくろうと思ったきっかけを教えてください。**

（監）映画の中にも出てきますが、子供たちの短編映画のコンテストが年に1回開催されています。私はその審査員長をやっており、そこにセルヴォニ先生が適応クラスの子供たちを連れてきました。セルヴォニ先生から、20カ国の子供たちが集まったクラスだと聞いて、きっとこのクラスは、異文化が混ざり合うことの豊かさを感じられるのではないかと思います。近年、ヨーロッパでも人種差別の傾向が強くなっているなかで、各国の子供たち一人一人の個性や価値を映し出す作品をつくりたいと思い、撮影するに至りました。

また、セルヴォニ先生の人柄にも惹かれました。子供に向ける目線がとても柔らかかったからです。直感で何か持っている先生だと思いました。

幸い、学校が自宅のすぐ近くで自転車でも行ける距離だったので、カメラを担いで毎週通い続けました。

**Q. 一年密着取材をしたと聞いています。生徒さんたちがまったくカメラを意識していないように思いますが、どのように距離感を縮めていったのですか？**

（監）まずは自分の自己紹介を大切にしました。自分がどういう映画をつくってきたかということや、自分はどういう人間かということも話しました。子供たちと決してかけ離れた存在ではないのだということ、そして一緒にやっていきたいのだという想いを伝えました。

子供たちは当初、緊張したり意識しすぎたりしていましたが、次第に私が外部の人間ではなく、クラスの仲間だと感じてくれるようになり、カメラにも自然に映すことができるようになりました。

ただ、カメラを意識しない分、子供たちは一斉に話し始めるので、どこにカメラを置いておくかに苦労しましたね（笑）。



**Q. 適応クラスはフランスの様々な学校に設置されているのですか？**

(先) フランスには年間約 3～4 万人の移民の子供たちが入ってきます。そのフランス語をしゃべれない子供たちのために、フランス全土にこうしたクラスは存在します。ただし、パリに人口が集中するため、フランス全土に 840 校あるうち 140 校がパリに、残りの 700 校が他地域に散らばっています。

小・中・高校、全部の年代向けの学校があり、今回の映画に出ているのは 11～15 歳までの子供たちです。



**Q. 適応クラスはどれくらいの規模なのですか？また、どんな子供達が集まっているのでしょうか？**

(先) 毎年大体 22～26 人のクラスです。亡命で来る子と、移民で来る子とがいます。みんなバックグラウンドは多様です。お父さんと一緒に暮らすために来た子や、お母さんがずっとフランスで働いていたために来た子、音楽の勉強のために来た子もいれば、母国で子供は教育を受けられないために、フランスの親戚の家に預けられてきた子もいます。ただ子供たちはみんな、自ら望んで来たわけではなく、親の事情で従わざるをえずに来ています。祖国では大きな家に住んでいて、友達もいたけど、フランスでは小さい家に押し込められて生活しないといけない。最初はみんな苦痛で仕方ありませんが、適応クラスのなかで少しずつ心を開いていきます。

**Q. 適応クラスで教えるときに心がけていることはありますか？**

(先) 子供たちはみんな非常に情熱的です。確かにこの仕事は難しいですが、私たち教員の側も情熱を掻き立てられます。

子供たちはいろんな経験を経て、学校に来ています。それも自ら望んだのではなく、両親の意向や、様々な経済的・政治的理由で来ています。子供たちには、自分が経てきた困難や辛い生活を言葉にして、表現する機会を与えるようにしています。一人一人話すことによって、自分だけが苦しんでいるわけではないこと、自分は一人で生きているわけではないことを伝えたいのです。また、自分の国のことを一生懸命話そうとすると、「言葉を覚えない」とと言語学習のモチベーションもあがってきます。

**Q. 言葉はアイデンティティの一部だと思いますが、言葉を新しく覚えるということは、言葉を失うともあるかと思います。そうした点を子供たちはどのように感じているのでしょうか？**

(先) 新しい言語を習得することは母国語を忘れることではありません。映画のなかで、「こんにちは」をそれぞれ母国語では何というのか尋ねるシーンがありますが、自分の言葉や文化を否定するのではなく、母国語が素晴らしいものだとして再認識し、アイデンティティを保ちながら学んでいくのです。

**Q. フランスでも、極右の政党が台頭してきたり、移民に対して良い感情を持たない人が増えてきたように思います。今のフランス国民の移民に対する感情をどのように考えますか？**

(監) 移民の問題はヨーロッパでも取り沙汰されています。フランスでは国民の約 20%が極右政党を支持しています。ただ極右政党の支持者の中には、フランス政府が問題ばかり抱えているために、それに対する反感から支持している人もいます。

最近メディアでは、何か事件が起きるとすぐに移民を生け贄にして取り上げ報道します。今回の映画はそうした移民の問題が年中起きている訳ではないこと、そして、子供たちにしっかりと教育をすれば、きちんと社会のなかで生きていけるようになることも示しています。

**Q. 日本も移民を受け入れたほうが良いと思いますか？**

(監) 異文化に触れると様々なことを学ぶことができるので、移民の人を受け入れていかないとフランスは良い国になっていかないと思っています。また、移民の人は母国で生きたくても生きることができないために、移住してきます。彼らを保護することは豊かな国の義務だと思います。隣人に手を貸すという意味で移民の受け入れを続けていけば、フランスで将来もし戦争があったときなどに、周りの国の人に助けてもらえるとも考えています。

(先) 全く同意見で、異文化に触れることで様々なことを学ぶことができますし、それは生きる上で大切なことだと思います。そもそもフランス文化も、たった1つの文化で成り立っている訳ではありません。違いとは、一つの豊かさの象徴なのです。そういうものを糧にして生きていく必要があると思います。

**Q. 映画を通して伝えたいメッセージは何ですか？**

(監) まず、国や文化の違いは決して悪いことではなくて、素晴らしいことなのだという事をお伝えしたいです。「みんなと同じ」である必要はありません。そのほうが安心できるかもしれませんが、もっと自分の個性を出して生きていきましょう、と言いたいです。

また、他人を受け入れること、他人に偏見をもたずに接することは、非常に大切だということもお伝えしたい点です。相手を理解することで人種問題もなくなり、共存していけると思います。外国人を温かい目で迎え、隣ににいる人にいつも手を差し伸べる心がけが必要だと考えています。他人の立場に立って考えるのです。適応クラスが、日本を含め、世界各国でできるといいですね。学校で一度躓いてしまうと、一生の問題になって、社会に馴染むことができなくなってしまう。受け入れてくれる場所がないと、益々孤立してしまうのです。



また、成績だけを重視しないことも大切だと考えています。例えばセルヴォニ先生は、3回まで同じ試験の受験を認め、そのなかで一番良い点数を反映してあげています。フランスでもまだ成績を重視するところが多く、躓いてしまう子も多いです。そうした教育体制も変えていく必要があると思います。「試験試験...」と言って子供を追いつめるのではなく、子供たちが学校に楽しく通えるのが一番ではないでしょうか。

**Q. 今後の予定を教えてください。**

(監) まずは1つフィクションものを撮る予定です。これは家族をテーマにした作品で既にシナリオは完成しています。また、ドキュメンタリーも撮影予定で、こちらは障害をかかえる25歳の女性を追った作品になる予定です。ただ、どこにどんなご縁があるかは分かりません。この映画を撮ることができたのもセルヴォニ先生にお会いできたご縁のおかげです。もしかしたら日本滞在中にも新しいご縁があるかもしれませんね。

(先) ずっと教師をしてきましたから、まさか自分が映画に出るとは思っていませんでした。大変すばらしい経験をさせていただきました。今はフランスの先生方を指導する立場にありまして、今後もその仕事を続けていくつもりです。

※ブリジット・セルヴォニ先生は映画の撮影後、24の学校、380の先生を監督するフランス国民教育省の教官となりました。

## ●海外評

- 先生のすべての文化を大切にする姿勢と、寛容な姿勢が見逃せない。 - STUDIO CINÉ LIVE
- ローラン・カンテ監督の『パリ 20 区、僕たちのクラス』と対象をなすような、このノンフィクション作品は、フランスの現代的な人種のるつぼに対する楽観的で感動的な期待を掻き立てる。
  - ニューヨーク・タイムズ
- 最初から終わりまで、心を打たれる作品。 - LES INROCKUPTIBLES
- きっとあなたを良い気分にしてくれるであろう作品。 - ELLE
- 啓蒙的でとても感動的。 - FILMCOMMENT
- 人種差別がなくなった世界とはこういうことか。見応えのある作品。 - PREMIE?RE

## ●フランス映画祭 2014 での上映後の反応（Twitter より抜粋）

- すごい良かった。「世界の果ての通学路」は学校に着くまでの険しい自然の道のりだったけど、こちらは着いてからの話。
- 多国籍の子供たちが学ぶクラスを追ったドキュメンタリー。先生が根気良く子供たちに接していて。先生に恵まれなかった私には羨ましい教育現場。
- 素晴らしかった。観終わってあの先生が目の前に現れて、自分の「初めての先生」と「自分の可能性を信じてくれた先生」と「最後の先生」を思い出して涙が止まらなかった。トークショー中に泣いていたなんて初めて。
- 期待通りのやさしい映画でした。トークには先生（右）も登場、会場がやさしくどよめきました。は一、自分までやさしい人になれた気がする…
- これだけバラエティに富んだ生徒をまとめあげた先生がすばらしいのなんの。多感な年頃かつ無邪気な彼らが、感情のままにはつらつとした姿が印象的なドキュメンタリー。
- 感涙。国籍人種さまざまな子供たちにフェアな先生。トークショーは思いがけずその先生登場で大感激。わたしもあんな先生に出会っていたら、やさぐれずに済んでいただろうな。